

もくじ 「デザインアイデア合戦」大賞決まる! 1P 千住警衛と天狗党の乱② 2P
 足立にあった牧場 3P ここで見て足立の博物館資料 3P おでかけ下さい地元の古代 4P



中村美里氏 コースター図案

文化十二年(一八一五)十月二十一日、千住酒合戦と呼ばれる一大イベントが行われました。今年、千住酒合戦からちょうど二百年にあたり、

千住ではそれを記念して様々な事業が開催されました。郷土博物館では、「デザインアイデア合戦」を開催しました。これは、郷土博物館が所蔵している足立区ゆかりの資料の中か

「デザインアイデア合戦」大賞決まる!

足立史談

第574号

2015年12月15日

足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 (27-308)

ら、約五〇点のデータを公開し、それを使った商品のデザインアイデアを高校生以上の方から募集し、酒合戦にちなんで、そのデザインアイデアを競うというものです。大賞に選ばれた作品には、足立成和信用金庫のご協力により、賞金十万円が贈呈されます。

応募総数は、八四点、個人の方から企業が作成したもので幅広い層から応募がありました。博物館では、第一次選考を行い、その中から三二点の作品を選び、東京電機大学東京千住キャンパス内の電大ギャラリーにおいて展示しました(十月三十一日～十一月二十三日)。

審査員には、川越仁恵氏(日本経済大学)・松葉孝一氏(足立成和信用金庫)・井元浩平(足立区地域)のちから推進部長の三名を迎え、一般投票の結果も交えて、十一月十七日に電大ギャラリーで厳正な審査が行われました。

大賞に選ばれたのは、中村美里氏が応募したコースター図案です。写真には中村氏が作成した企画書で、ガラスの下に博物館所蔵の浮世絵をもとにしたコースターがあるのがわかります。「立体的なコースターは初めて見た」「グラスの向こうで、遠景がお酒にゆらゆら浮かんで見え、手前にはインパクトのある近景があり、浮世絵の楽しみ方が現代的流儀

である」といった点が高く評価されました。

惜しくも大賞に選ばれなかった作品の中には、「模様そのものを考案したことがすごい」と評価された浮世絵のモノグラム図案、車の周りを博物館にするというコンセプトで応募されたカーサンシェード、スマホケースやはんこの図案などもありました。ほかにも、独特のデザインアイデアや、大変手の込んだ作品などもあり、応募して下さった方々の熱意が伝わるものばかりでした。応募して下さった皆様には、深く御礼申し上げます。(郷土博物館)

千住酒合戦とは!?

時期 文化12年(1815)10月21日
 場所 千住一丁目
 主催者 飛脚問屋 中屋六右衛門
 優勝者が飲んだ酒の量
 千住宿の松勘 9升2合!!
 主な審査員
 亀田鵬斎(書家) 酒井抱一(琳派)
 谷文晁(文人画)

資料紹介

千住警衛と天狗党の乱 ②

多田文夫

元治元(一八六四)年三月、水戸藩の尊皇攘夷派、藤田小四郎らが攘夷が実行されないことから、筑波山

で挙兵した天狗党の乱が発生した。北関東各地で天狗党は騒動を起こし、將軍家茂が上洛していた幕府も、攘夷実行の対応が決まっていなかった。そうした中、発生したのが六月二六日の夜に発生した天狗党の江戸出府事件である。

幕末の千住警衛(幕府の千住宿警備隊)をつとめた出羽松山藩の動向を記した阿部正巳の記述をさらに紹介して当時の状況を確認しよう。

即ち元治元年六月二十六日夜、水戸藩士大久保甚五左衛門、鳥居瀬兵衛、神原新左衛門等五六十人、千住に來り印鑑を示して江戸に入らんとするにより、松山藩にては、番頭林重次郎、加藤一格を名代として甚五左衛門の入府を許し、瀬兵衛等多数の入府を拒絶したり。是に於て多数は新宿の茶屋に止宿す。時に耕雲齋は其徒千五百余人と小金町に滞在す。同日、彼の番頭二人は此事を直に淺草の藩邸並

に宗藩(庄内鶴岡)、神田橋邸に急報す。

この記述の経緯をまとめてみよう。天狗党幹部で水戸藩の大寄合頭や訓練司をつとめた大久保甚五左衛門ら約五〇名の先發隊が千住に通行証を持参して江戸入府を求めてきた。出羽松山藩は大久保の入府を許可したが、他の天狗党の入府は許可しなかった。千住五丁目設置されていた新聞所はおそらく緊張につつまれ、千住警衛の本陣・安養院も騒然としただろう。夜とあるから、かがり火や提灯の灯明の中、幕府の警衛と天狗党員がにらみ合っているようすが見えてくる。

記述の後半を見ると、千住まで来た他の天狗党員は、水戸街道を戻って新宿(葛飾区新宿)に止宿している。本隊の天狗党は水戸藩の執政までつとめた党の首領、武田耕雲齋が、さらに水戸よりの小金宿(松戸市小金)に一五〇〇名を率いて駐屯していたと記述されている。

資料には「操兵練志録」(庄内藩士秋保政右衛門著)からの引用によ

る千住警衛から本藩への連絡文も記載されている。

四ツ半時過新宿より注進には、新宿藤屋と申茶屋に無挑灯にて名前不相知、水戸殿御家來五六十人参居、猶追々参着の様子、小金町には千五百人余も集居候様子、先夫々手配致置候得共、何分道路附近にて、甚心配仕居候、右に付早乗を以て不取敢申上候、以上、

千住当番 酒井大学頭様御内
六月廿六日 林重次郎
加藤一格

金井 男四郎様
秋保政右衛門様

出羽松山藩番頭たちから本藩であつた鶴岡藩邸への連絡文書である。文中に「はなはだ心配仕り居りそうろう」とあり、「早乗」、つまり馬で急報したようすが記されている。

この情報に接した鶴岡藩邸からは翌日の六月二七日の朝、六一名が大砲と小銃に弾薬を込め、千住に來援した(資料は省略)。二七日に至り、さらに千住と周辺は緊張に包まれたことが記述されている。

此日水戸藩士の千住関外に集るもの約一万人なりといふ。千住付近の村民、兵戦を懼れて避難する

もの多し。既にして水戸藩士は多数衛所に來り、江戸の水戸藩邸に入らんことを頻りに請へども、警衛の藩士拒んで入れず。此の如き状態なれば幕府に請ふ。

この千住警衛は天狗党らの水戸藩士を江戸府内に入れないように対応した、戦闘が発生するかもしれないという状況が生まれたようである。千住宿周辺の村では避難する村民が出ていたと記述している。

この時期、まだ天狗党は幕府の敵にはなっていない。幕府政事総裁職だつた松平直克(川越藩主)は、攘夷を擁護し天狗党の武力討伐に反対し幕閣内で対立が起こっていた段階である。攘夷思想と開国という国論を二分した時代であること、各地で騒乱が起きていたことを想起すると、この事件を目的の当たりにした千住宿と周辺の緊張がわかる。

さて、天狗党の出府に伴って避難があつたという周辺村落はどこであろうか? 水戸街道付近だとすると弥五郎新田(現日ノ出町・足立)、伊藤谷村(現綾瀬)あたりだろうか、柳原村(現柳原)も入っている可能性もある。この天狗党の事件については区内で言い伝えや資料を確認していない。もし情報があれば博物館までお知らせいただきたい。

(博物館学芸員)

足立にあった牧場

佐藤 貴浩

現在の足立区からはおよそ想像できないのだが、足立区には数多くの牧場があった。足立で牧場が開かれた端緒は、明治維新直後の明治三年頃まで遡るといふ（編集部「牛頭観世音とその後」『足立史談』一二〇、一九七八年）。足立は、江戸の東郊に位置する農村部であり、江戸の食物の供給地であった。そうした歴史の中で、足立で乳業が盛んとなったのも自然のことである。

昭和一五年から東京都乳牛畜産組合足立支部に勤務していた瀬田正治氏によると（「足立の乳業」『足立史談』一二〇、一九七八年）、昭和一八年ごろの足立区には、三〇もの牧場と九五〇頭の牛が飼育されていたといふ。しかも、この数字は、減少傾向に入った頃のものだといふから驚きだ。

牧場の分布は、千住をはじめとして関原・本木・興野・栗原・梅田・島根・梅島・小右衛門（当時）・五反野・保木間・青井・普賢寺（当時）にあり、区内の広範囲に及んでいた。区内で搾乳された牛乳は、森永・明治・雪印などと契約を結び、集荷されていった。

写真1は、本木にあった荘司牧場

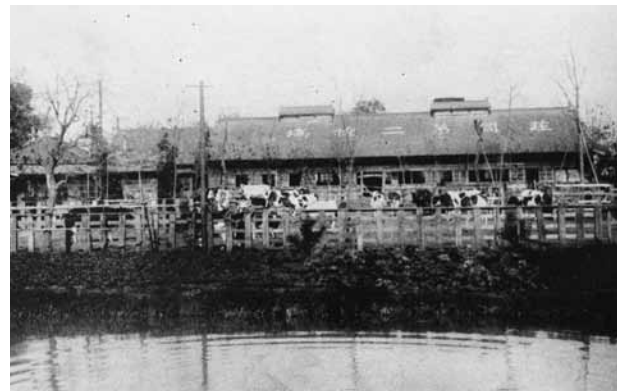


写真1

を写した戦前の写真である。この周辺の牧場は、荒川放水路の堤防を放棄場にしていたそうだ。

昭和二九年に辰沼に浅田牧場を開いた浅田良作氏は、戦後の食糧不足の中で、子供たちに牛乳を十分に飲ませたいと一頭の牛を飼ったことが牧場を始めたきっかけだといふ（『足立風土記稿』八、一九九六）。

写真2は、昭和五〇年頃のもので、六木にあった月館牧場の写真である。月館牧場は月館民雄氏が昭和二七年に開いたもので、多い時期には一〇〇頭以上の牛を飼育していたといふ。牛たちが出した汚物は、近くの農家で肥料として用いられたといふ、付近の農家との間でうまく循環されるシステムができていた。し

かし、宅地化が進み、乳牛の飼育が難しい環境となる。それでも、月館氏は牧場にこだわり、規模を縮小し昭和末より平成初頭まで酪農を続けていた。一方で、昭和四七年には、北海道の牧場（現よつば乳業株式会社）から牛乳を共同購入し、それを販売することを始めている。浅田氏や月館氏の牧場に対する熱い思いが伝わる話である。



写真2

足立区は、江戸時代、七〇％が田畑だったといわれており、牧場を開きやすい環境にあった。しかし、明治初期から昭和五〇年までの間に人口は二〇倍に増え、牧場を営営することは難しくなった。そうした歴史の中で、牧場は足立区から姿を消していくのである。

（郷土博物館専門員）

ここで見て足立の博物館資料

小説を彩る

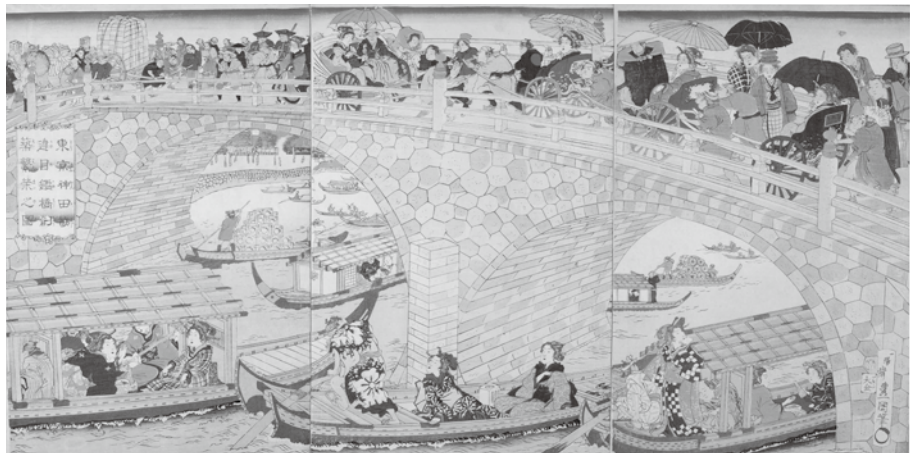
郷土博物館の澤世絵

足立の町に由来する作品はもろろのこと、多様な絵師・ジャンルの作品を幅広く網羅する郷土博物館の浮世絵コレクションは、博物館での展示以外でも、書籍など刊行物の挿絵やテレビ番組の参考画像など、様々な場所でご利用頂いています。本年十月に刊行された小説家・梶よう子氏の最新作『ヨイ豊』（講談社）では、当館所蔵の四代歌川豊国（二代国貞）作『東京神田筋違眼鑑橋創築繁栄之図』（明治六年、大判錦絵三枚続）が、書籍の見返しを飾りました。

梶よう子氏は、足立区出身の時代小説家です。平成二六（二〇一四）年十二月には、区立中央図書館で開催されたトークイベントで、梶氏がしばしば物語の題材とする、江戸の下町文化とそこに暮らす人々について、講演をして頂きました。

最新作となる『ヨイ豊』は、幕末浮世絵の牽引者である三代歌川豊国の後継、二代歌川国貞と豊原国周を通して、幕末から明治への世相と、終焉へと向かっていく浮世絵の姿を描いた物語です。見返しに使用された『東京神田筋違眼鑑橋創築繁栄之図』

四代歌川豊国 (二代国貞)
《東京神田筋違眼鑑橋創築繁栄之図》
明治 6 (1873) 年、大判錦絵三枚続



図》の他、四代豊国《東京品川口蒸気車往来之図》(明治五年、大判錦絵三枚続)、豊原国周《復讐誓彦山四代目中村芝翫の毛谷村六助》(明治六年、大判錦絵)といった郷土博物館でも所蔵する浮世絵が次々と登場し、語られることの少ない「明治の浮世絵界」の物語を彩っています。

おどかけ下から 地元の古代

5

足立区地域文化課文化財係

今回は伊興遺跡公園で一番目を引く、復元された古代の竪穴住居についてご紹介します。

本来の竪穴住居は、地面を掘り下げ、床に四本の柱を立て、茅で屋根を葺いた住居です。半地下式のため、温度変化を受けにくく、夏は涼しく冬は暖かかったようです。

この住居は、縄文時代から作られ始め、地方では、平安時代まで一般の人々の間で広く利用されてきました。住居の形は時代が下るにつれ、円形から隅丸方形、方形へと変化していきます。

古墳時代中頃になると、それまでの炉に代わり、カマドが作

伊興遺跡公園展示館

古代の住宅事情・竪穴住居

られるようになります。炉は住居の中央付近に設置されましたが、カマドは住居の壁際に設けられました。

伊興遺跡では、古墳時代中頃の住居が多く検出されています。

公園に復元された住居の中では、秋の夕暮れ時の様子を再現しています。カマドでは母親が沼地で採れたレンコンや森で採集した木の实やヤマイモを調理しています。子どもたちは、夕飯を楽しそうに待ちわびているのでしょうか。その横で父親は農具の手入れに余念がない温かな一家団らの光景です。



写真 1 復元竪穴住居



写真 2 竪穴住居内部の様子

足立区では古墳時代初期頃から、毛長川の両岸に発達した自然堤防上に、人々が集落を形成するようになりました。集落跡からは漁網に用いた土錘が多く見つ

郷土博物館臨時休館のお知らせ

平成 27 年 12 月 7 日 (月)

～平成 28 年 1 月 4 日 (月)

上記の期間、館内エレベーター工事のため、臨時休館させていただきます。

ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどお願いいたします。なお、東瀨江庭園や臨瀨亭は、通常通りご利用いただけます。

年末年始 12 月 28 日(月)～1 月 4 日(月)は、すべてお休みです。

かっていることから、毛長川で盛んに漁撈が行われていたようです。復元住居の中には、これから食卓に出されるのではないのでしょうか、川で獲れた活きの良い魚もおいでありませす。また、鋤や鎌といった農具類や土器などの日用品が多数出土しており、古代集落の繁栄の様子がうかがえます。

是非、伊興遺跡公園においていただき、復元された竪穴住居をつぶさに見学して、古代の人々の生活に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

(遺跡発掘調査員 鎌田 望里)